How Technology would Meet with Future Care Demand in Japan and the UK?」と題する共同研究について報告した．人口研究を主とする同学会にあってはやや趣が異なるテーマではあったが，ジェンダーや家事労働に関心のある研究者を中心に20名ほどの参加があり，活発な意見交換が行われた．筆者の他に，日本からは，お茶の水女子大学大学院の永瀬伸子教授，その院生の江天瑶さんが参加し，同じパネルで報告を行った．また，南デンマーク大学の茂木良平氏も参加しており，数年ぶりに旧交を温めた．

英国人口学会は，米国人口学会と比べるとかなり小規模であり，アットホームな雰囲気であった．参加者は英国からの研究者が主ではあるが，他のヨーロッパ諸国からの参加者も多く，オープンで気さくな雰囲気であったことも印象的である．また，今次大会では，キャンパスにある宿泊施設（学期中は学生寮となっているものと思われる）に滞在する形であったため，経済的であり会場までの往復も非常に楽であった．また，昼食はもとより，朝食や夕食も会場で提供されたため，参加者との交流に多くの時間を割くことができた．

今回の英国出張にあたり，英国人口学会でのパネルセッションを企画し，オックスフォードでの滞在に便宜を図ってくださったヘルトグ准教授にこの場を借りて感謝申し上げる．　（福田節也　記）

日本地理学会2023年秋季学術大会

日本地理学会2023年秋季学術大会は，2023年９月16日（金）～19日（火）に関西大学千里山キャンパス（大阪府吹田市）で行われた（9/16はミニ・エクスカーションと公開講演会，9/17と 9/18はシンポジウム，口頭発表，ポスター発表ほか，9/19は巡検）．9/17の「人口・行動」セッションでは下記６本の報告が行われ，筆者は前半３本の座長を務めた．

蒋 宏偉*・佐藤廉也（大阪大）：日本における食事摂取動機の地域差―私たちはなぜ，私たちが食べているものを食べるのか

村越貴光（駒澤大・院）：大学生による東京都市区町村の名称認知と位置認知

井上 孝*（青山学院大）•井上 希（国立社会保障・人口問題研）：東京西郊の私鉄沿線における将来推計人口の時空間分析

野村侑平（早稲田大・院）：JR 西川口駅周辺におけるエスニック・タウンの COVID-19による空間変容

宋 弘揚（梅光学院大）：労働力送り出し転換期における促進の取り組みと送り出し機関の対応と課題―中国の労働力海外送り出しプログラムを中心に

阿部康久*（九州大）・李春嬌（日本 IBM）：中国の出稼ぎ労働者にみる近年の出稼ぎ先の変化と将来の定住希望地域―河南省三門峡市盧氏県の農村出身者を事例として

「人口・行動」セッション以外においても，今後いっそうの人口減少が確実な状況のなかで，いかに持続可能な地域社会を構築していくかというテーマに焦点を当てた報告が多くみられた．とりわけ下記は，様々な観点からの過疎地域再生の試みがうかがえる興味深い報告であった．

中澤高志（明治大）：表出する関係性と日常―大分県佐伯市船頭町・大手前地区の変容について

荒井良雄（帝京大）：離島における ICT を利用した生活・産業インフラの改善の試み―山形県飛島の事例

作野広和（島根大）：過疎地域のコミュニティが目指す「縮充」とその方策
櫛引素夫（青森大）：JR 津軽線の試練（第 2 報）―沿線の地域活動を交えて
本多広樹（山形大）：先端技術活用による中山間地域の変化―長野県伊那市の事例

（小池司朗　記）

日本経済学会2023秋季大会

2023年 9 月16，17日開催された，日本経済学会2023秋季大会@関西大学千里山キャンパスに参加した．私は Fudan University の Mingyu Jiang 氏の論文“Working from home, job tasks and productivity during the COVID-19 pandemic”の討論者を務めた．

本大会でも多種多様な研究があったが，テレワークや会議室の在り方，育休制度など，いわゆる「柔軟で生産性の高い働き方」というテーマが例年よりも多かったように思う（私の討論論文もこのテーマだ）．個人的には会議室をクローズドにするよりも，オープンにした方がより生産性が高まる，という実証をした浅川慎介氏の論文が面白かった．また，郭秋薇氏の，出産・育児期のどのような就業支援が，女性のキャリアに有効な施策かを考察した研究も興味深い．単一の制度の効果を見た研究は多くあるが，複数の制度を組み合わせた効果をみた研究は，筆者の記憶の中では初めてであった．非常に政策的・企業人事的示唆に富む発表で，研究者だけで共有するにはもったいないと感じた．

本大会で最も印象に残ったのはチャールズ＝ユウジ＝ホリオカ氏による日経学会会長講演だ．ホリオカ氏（当時なんと24歳！）がハーバード大学のマーティン＝フェルドシュタイン教授と1980年に発表した“Feldstein, M., & Horioka, C. (1980). Domestic saving and international capital flows. The economic journal, 90(358), 314-329.”は「フェルドシュタイン＝ホリオカのパズル」と呼ばれ，国際金融の分野で最も有名な論文の一つとされている（2023年10月25日時点で，Google Scholar での引用数は5345件である）．これは，「資本移動が自由化されているならば，資本の限界生産性は各国で同一になるように国内貯蓄が海外投資に振り向けられるはずだが，なぜデータ上では国内貯蓄の大半は国内投資に向かうのか」，という内容である．講演はこのパズルが解けた，という報告だ．この議論は学部 4 年生の時に初めて知ったが，あまり覚えていなかった．当時の理解力と知識では，その意義をあまり理解できなかったということだろう．改めて発表を聞くといろいろな教訓が入っているように感じた．

これがなぜパズルなのか？（例えば，金融機関に勤める）一般の人には理解できないだろうと思う．ただ経済理論を学んだ人ならば，理論が予測する結果と現実が食い違い，不思議な現象であることが理解できる．理論に基づいて現象を予測し，データという現実で整合性を確かめ，理論の妥当性を問う．理論が反証されるとまたデータを説明できる理論を考える，という科学の発展のプロセスを感じる．また，論文内の分析は学部 1 年生レベルのもので，そこにも驚いた．テクニカルな分析ではなく，やはり問題意識と着眼点が重要であると改めて認識した．パズルの解答は，財市場を考慮すれば現象が説明可能になる，という実にシンプルなものだった（もちろん分析やその結果の解釈には，議論の余地はあると思われる）．難題の解答も意外と身近なところにある場合も多い，ということに気づかされた．いたずらにテクニックに走るのではなく，様々なデータを虚心坦懐に観ることの重要性である．私自身が実証研究者であるため，今後の教訓にしたいと思えた．

私が最後に対面の学会に参加したのは，2019年夏であったため，対面学会は実に 4 年ぶりであった．知り合いの研究者と久々に話し，論文などで名前は知っていたがお会いしたことのない方に挨拶できたのは良かった．しかし，対面学会のデメリットも痛感した．まずは費用である．昨今の物価高騰か